

川合道雄著『網島梁川とその周辺』について

山本昌一

明治三十年代の宗教と文芸というとき、文芸の方は最近研究も進んでいるようだけれども、宗教と文芸という相關関係でみるとまだはっきりしない部分が多くあるように思われる。その三十年代の代表的な思想家の一人である梁川に対して、既に八年前になるがその当時久し振りの梁川研究書であった『網島梁川の生涯と思想』（虫明夙・行安茂編 昭和56年4月 早稲田大学出版部）の「まえがき」で梁川についての「総合的な研究書は意外にも皆無に等しい状態である」（虫明夙）という指摘がされていた。しかし「総合的」「皆無に等しい」といういいまわしをどう解釈するかにかかわることではあるとしても、川合道雄氏の今度の新著は梁川研究の「総合的な研究書」（傍点山本）の一つであるといえよう。ただしこれには条件があり、この『網島梁川とその周辺』（*以下『周辺』という）の前著である『網島梁川の宗教と文芸』（昭和48年7月 新教出版社）と合せみることによってよりまとまった梁川研究となるのだと考えられる。いうならば皆無ではなかった。前著を論考編とするなら、本書は資料編ともいえる。じじつ『周辺』の「あとがき」で「その後の小論教編と、

主として梁川周辺の調査を中心に、一、二の小文を加えて一応の後編とした」と川合氏のいわれるごとくであり、両書あわせて一本とすべきものといってよいだろう。その前著『網島梁川の宗教と文芸』の題目を参考までに記すと次のようである（全論文サブタイトルがあるが*を付したものは省略させていただく）。

『網島梁川覚え書』（*その神秘的宗教思想を中心として）、
「梁川における宗教と文芸」、「病間録」への序章、「病間録」の詩的性格、「梁川の詩観」（*『病間録』に現れた実意識の詩的展開）、「見神の実験」序説、「網島梁川」、「網島梁川の宗教的評論」、「初期『梁川会』のことども」

右のような内容のこの著では梁川の信仰の推移を三期にわけ、ある特定の信仰の立場からの断罪をさけ、あくまで梁川の宗教的、思想的展開を梁川の言葉に即しながら穩健に再構築する姿勢で論を展開している。右にあげた論題からもうかがわれるように、大まかにわけると初期のキリスト教信仰から離れ動揺する梁川、『病間録』を中心とする梁川、「見神の実験」の梁川という三つの時期における「宗教と文芸」の関連がたどられているわけだ。かりに「総合的」といったけれども、著者は梁川のもつさまざまな問題を考察する意図はなく、梁川が「すぐれた倫理学者としてのそのほか、ローマン主義思想家、宗教家、あるいは晩期の見神論に視点を据えた一種の神秘主義の思想家、評論家、さては聖者、モラリスト」（二二二頁）等々の面があることは充分承知の上で、その要となるべき宗教と文芸に的をしぼっており、現象面より中心部をかためて行こうとしたものであった。ただ私の受けた

感じでは「と文芸」とある文芸面より宗教的則面からの切り込みが多いようだ。

こうした経過をたどってみると本書『周辺』の性格も一応はっきりしてくる。この書での論考の部分は前半の「綱島梁川の神——その思想形成期の苦悩から——」、「梁川の全体像を求めて——樗牛への回想とともに——」、「梁川における宗教的意識と美意識——その汎神思想を軸として——」、「梁川における汎神思想——その美意識とのかかわりにふれて——」の四編であり、後半の「綱島梁川（一八七三—一九〇七）」、「綱島梁川の周辺——その生地及び家系をめぐって——」、「梁川と東京専門学校——卒業文集「おもかげ」のことなど——」、「梁川をめぐる人人——『回覧集』を中心に——」、「梁川会と川合山月——『回覧集』の同人として——」の五編がはじめの一編をのぞいて資料編となっている。その点では「周辺」は周辺の人人についての論考ではなく、梁川周囲の人人の資料の紹介ということになるわけだ。

まず最初の「綱島梁川の神」では梁川が「神に憧れ、神に恋した人」であるとして、そこへ至るまでの過程で正統的な信仰と訣別した梁川が、新しい信仰の回復を遠望しながらおぼろな姿を見せる神（宗教意識）に触れてゆく姿を師大西祝との関連において追究されている。これは前著ではなかった梁川が影響を受けた人々との比較検討であり、前著の課題を一步前進させたものでもある。ここで、祝と梁川との宗教的見解を「極めて近似した立場」と指摘されているが、梁川の方はわかるとしても祝の「立場」が祝の方から見るとどういうものであったかの検証がない。その

「近似」の部分と相違の部分についての統稿を期待したいが、あるいは著者は失礼ながらその口吻をお借りしていえば「そんなことは知ったこっちゃないですよ」と面倒くさそうにおっしゃるかもしれない。次の「梁川の全体像を求めて」は明治三十年代の青年たちのヒーローであった高山樗牛と対比し、たとえば安倍能成の二者に対する対応の仕方を指摘しながら、結局当時の青年が梁川の方をとるに至った理由として「梁川の生活態度——自己について静かに考え、『その自己』を誠実に辿る『実践者の道』であることを指摘している。そして結論として梁川「思想の中核にあるのは、人格において具現され、生活（行為の場）において実証されるべき道徳的、宗教的真理（ないし理想）としての神であったこと」を挙げている。「神」を中心とした「誠実」な「実践者」としての梁川が青年たちにアピールしたといわれるごくである。ただ我々宗教的部外者からすれば「宗教的真理としての神」がどういう種類の「神」なのか自明のこととせず再度検証しながら説明していただきたいところであり、あとで再度触れることにする。

三番目の「梁川における宗教意識と美意識」は右の「梁川の全体像を求めて」の総稿のかたちで梁川の汎神思想を宗教意識と美意識の包含する問題として扱おうとしたものである。梁川の信仰喪失の時期である明治二十六年あたりから真言他力の教に近づいた三十六年ごろまで宗教意識の推移をたどりながら、その時期を通じてうかがえる梁川の汎神思想が、たとえば芭蕉に対する美意識と融合している点を論証し、さらに海老名弾正（*）についていふ

れおけばこの論文における誤植は大変多く彈正も禪正とすべてなっている）への接近の中に海老名の当時の宗教界への批判を見、その海老名への共感とともに梁川の汎神思想が当時のキリスト教界に対する不満から生じたものである指摘がなされている。前半の美意識の問題と後半の海老名彈正への接近の部分との関連がどういうつながりなのか判然としないが、芭蕉との対応の中に梁川の具体的な「美意識」の問題を論証した部分は大変興味深い。最後の「梁川における汎神思想」は上田哲氏が梁川をシャーマニズムの宗教観からとらえ梁川の見神を「仏教的バンティズム」とする見解に反論するかたちで、梁川の宗教思想を考え、梁川のそれがキリスト教を母胎としながら初期は禪への関心、晩期は浄土真宗への接近があるとしても具体的な宗派に属さない立場に梁川がいたことを述べ、梁川の見神なども汎神論にして超神論の面をもっていたことを強調している。

以上錯誤をおかしながらの論旨紹介であるが、『周辺』での四編は重に梁川の汎神思想に論の力点がおかれているようだ。そこで私の理解不足を承知の上で感じたことを一つ申し上げるなら、梁川における汎神思想というとき、どういうものが梁川の汎神思想なのか川合氏の言葉を通して再整理していただきたい気がする。つまり汎神思想の説明として梁川の言葉をその例証とされるわけだが、川合氏も「抽象的、一般的な傾向を表示するにとどまる用語を、具体的、個別的な作家、思想家の内面にあてはめ、一律に評し去るには、より十分な検証が必要」（八十べ）と上田氏の論についていわれているように、汎神論の、あるいは「神」

の具体的な説明部分を当の対象である梁川の名の言葉を引きのは「十分な検証」にはならないのではないか。外ならぬ梁川その人の汎神論があるとすれば、それは著者の言葉による再整理、再構築が必要なのではないかということである。著者である川合氏はわかっていても、読者である我々には実体がわかりにくいという点が感じられるのである。

さて後半の資料編ともいべき部分はいずれも興味深いものであった。厳密にいえば「綱島梁川（一八七三—一九〇七）」と「綱島梁川の周辺」は資料ではなく梁川伝というべきものできわめて手がたい調査であり、資料紹介は次の「梁川と東京専門学校」と「梁川をめぐる人人」である。特に後者で開陳された『回覧集』は容易に見ることの出来ない資料だけに貴重な紹介となっている。それは本書の三分の一を占める分量になっている。ここには明治から大正へかけて（あるいは昭和までも）活躍した人達たとえば小田頼造、一色義朗、中桐確太郎、宿南昌吉、斎藤勇、西田市太郎、宇佐美英太郎、川合信水、宮本和吉、安倍能成、魚住影雄、江渡信三郎他の人々の名前（まだあげたい名はあるが省略する）が見え、いかに梁川が当時の有為な青年たちをひきつけたかよくわかる資料である。また最後の「梁川と川合山月」は右の資料を山月の立場から紹介したものである。

資料の方はやはり何らかのかたちで公刊されると良いが、どうだろうか。また、回覧集に名前が出てくる小山頼絵を含めて安倍宮本、魚住などは漱石とも交渉があり、やがていわゆる岩波文化を築く力になった人達であり、思想的にも興味のあるメンバー

だが、この人達の梁川思想の受容を具体的に川合先生に検証して
いただきたい気がする。けれども、おそらく先生は重ねて「そん

なことは知ったこっちゃないですよ」とおっしゃるかもしれない。
い。(平1・4 近代文芸社 四六判 二九〇頁 一八〇〇円)

新刊紹介

手塚昌行著

『泉鏡花とその周辺』

本書は、昭和三十年代初めから泉鏡花研究を支えてこられた著者の最初の論文集であり、三十三年から六十三年までに発表された論文十九編と書きおろし一編(「泉鏡花と加賀藩」)を収録する。作品の成立考证が中心である。森田思軒訳の諸作品から観念小説へ、『アラビヤン・ナイト』から『名媛記』『高野聖』へ、『甲子夜話』の怪異譚から『妖魔の辻占』『朝湯』へなどの影響関係が指摘され、鏡花がそれらの先行作品から摂取した要素についての考察がなされている。作品間の関係にとどまらず、当時の文壇環境の解明にも力が注がれ、思

軒本人、原抱一庵にも論は及ぶ。これらの成果は、泉鏡花研究の最も基本となるものであり、本書は研究者必携の書といえる。

終始、鏡花の想像力の源泉を探らうとする情熱と、堅固な実証の精神とに貫かれており、オモテ表紙に鏡花の写真、ウラ表紙に柳田泉氏のメモを配した装丁からもそれを窺うことができる。

(平1・7 武蔵野書房 A5判 三一六頁 二四〇〇円) [市川祥子]

石崎等著

『漱石の方法』

この書物は作者の意図と歴史的文脈という概念について示唆的だ。著者の二十年間の両項の移動の軌跡は、作品の「構成的破壊」を導出する作者の意図の非充溢性によ

るものと考えられる。そこでより広い範疇として歴史的文脈が登場し、作者の意図はその一機能となる。

が、ここである明確化が行われている事に注目すべきだ。なぜなら、歴史的文脈を全て列挙し、作品の意味を決定することは不可能だからだ。歴史的文脈の無尽蔵さを考えてみよう。すると、何らかの文脈なしに語ることができる意味はなく、意味を語り尽くせる何らかの文脈はないのがわかる。ここで、作品は終らない解釈を要請する構造として新たに浮上するが、同時にそれは解釈を常に未決定のままにする。この書物の、著者の行程が示唆的であり、不可欠なのは、この構造を予想させる必然性にある。

(平1・7 有精堂 B6判 三三四頁 三五〇〇円) [永野宏志]